



IT が守る, IT を守る —天災・人災と情報技術

坂井修一(著)

NHK 出版, 248p., 1,000 円+税, ISBN978-4140911877

本書は、我が国において未曾有の災害となった 2011 年 3 月 11 日を起点として、著者自身が、体験したこと、感じたこと、見聞きしたこと、そして、それらを学者として研究者としての「目」で見つめた結果、「情」を尊ぶ歌人としての「心」で醸成し、高い文学性をもって、この「震災」を見つめたことを忘れないために一気に書き上げた好著である。東大のキャンパス内で始まった彼の 311 が、時間が経つにつれて、IT 学者として何ができるのか？ IT ではこの悲惨な現象は防げなかったし、予測もできなかったし、被害の状況やその後の放射能の被害も予測したり防いだりすることができなかった。やはり IT は無能で今回も役に立たなかったのではないか、という、トップの研究者としての責任感からも書かざるを得なかった、吐露せざるを得なかった、記録せざるを得なかったという「突き動かされた心」が緊迫感のある筆致で記述されている。

そのとき、私は、東京にいてひどい被害に遭わなかった。目の前の仕事や家族のこと、健康上のこと、それどころではない、行っても何もできない、無力感を感じたくない、何もできない、といったさまざまな思いがどうどうめぐりした結果、現地に行ってボランティアもできなかった。その後、Twitter や mixi で情報収集、仲間たちと情報交換、Google で検索しながら「仮想現実」で震災の事実を理解しようとした大衆の一人として、著者が書き残してくださった当時の状態の記録に、大いに共感を覚えた。

我が国を代表する歌人の一人である筆者の「情」は、選者である彼の触れる震災の心情を詠んだ短歌に封入された感情によって本当に動き出したのではないかと思う。数カ月後、夫人と東北の地へ車を走らせたという記述から、著者の気持ちが熱く伝わった。それは「今回も何もできなかった」という無力感や「もっという技術を」と、心に期するすべての科学者・技術者の気持ちをも代表し

てくださったと感じた。

今回の 311 のような現実の前には、現状の IT は未完であり、不全であり、無力である。しかし、本書にあるように、震災後さまざまな「取り組み」があったことも事実である。その中で、情報技術とメディア、そして人々の行動をどう折り合いをつけていけば最適化できるのか、いつになったら「ざまあ見ろ！人類は鉄腕アトムを手に入れたんだ！」と胸を張れるのか。そして、「いつかは胸を張るんだ！」という、すべての情報処理研究者の切実な決意を本書は代弁してくださったと感じた。

また、本書では、報道されているらしい、検索して得た、人から聞いた、新聞で読んだ、メールで読んだ、Twitter で書いている、等の不確かな情報を、いかに正しく選択し、よりよい行動変容につなげるかに関する考えも述べられている。これに関して、たとえば「健康に関連することがらの原理原則はそれほど多いわけではない。減量に必要なのはインターネットで宣伝されている魔法の食べ物ではなく、消費カロリーと摂取カロリーのバランスをコントロールすることである、という原理原則をリテラシーとして得ることによって、目の情報の真偽と有用性を帰納的に推定する」ことも可能ではないかと思う。311 後に起こったさまざまな情報の取捨選択に関する問題、それをどう扱えば良かったのか。今度、情報処理学会事務局の近くのお茶の水の店で、ビールかおでんか中華料理を食べつつそんな議論を著者にふっかけてみたい。

3 月 11 日の無力感を明日の情報処理学の元気の素にしていくために。

なお、私が非常勤講師をしている大学図書館に「未来を想像する皆さんへ」というメッセージを添えて寄贈していただいた著者の粋な計らいにこの場を借りて深謝する。

(中川晋一／一般社団法人 情報通信医学研究所)